

生きているということは

私たちは肉体と精神を併せ持つ命を授けられました。私たちがこの世に生きている意味は如何なるものであるのか考えたいと思います。私たちの現代社会は生産に寄与しない人間は生きる価値のない人間であるように捉えられています。生きる価値は何らかの形のある金銭を生み出すことが人間の生きる目的のように考えられている社会になっています。人間としての価値は果たしてそのような物なのでしょうか。人間として生かされている最大の使命は如何なるものなのかと言えば、私はこのように考えます。それは与えられた命を引き継ぎ、その命を次の世代に手渡すということです。命は個々の肉体の中で独立して存在しているのではなく、密接に連携し連続して存在していることを私たちは忘れてはならないのです。この自分の肉体と精神を司る命は自分自身のものだけではなく多くの人間を支える命でもあるのです。命が繋がっているという証明は、ある命が失われた時、そのことに対して必ず涙を流すたくさんの誰かが存在しているのです。繋がっていなければ命が失われても誰も悲しむ人はいないのです。生活空間が近ければ近いほど命の連携はより緊密になります。3.11の東日本大震災に於いて多くの命が失われた時、社会の機能がしばらくの間麻痺してしまいました。多くの働きが失われ、そのために命の連携が失われたためです。そのことを我々は体験しました。未だにこの連携は回復していません。私たちは新しい人に命を手渡すために、自分に与えられた働きをすることが私たちに課せられている生きる意味なのです。何かを生み出すことが我々に課せられた使命ではなく、人間が生きているということはお互いにそれぞれの命を支えることによって価値があるのだと思うのです。そのためにどのような働きが、自分はできるのかを見つけ出すために人は子どもの時から大人になるまで勉強をするのです。たとえその人が、生産性がなくとも、命の働きは重要です。赤ちゃんの命、お年寄りの命、それぞれが生きていることによって多くの人を支えているのが私たちの社会なのです。

しかし、社会はこの命の連携が失われています。現代社会は今、危機的な状態になっています。それは生きる目的が生産性とか経済成長とか、金銭的な物に、欲望を満たすために、あまりにも固執してしまって、本来の自然な人間の有り方から懸け離れてしまっているからです。他者の喜び、苦しみ、辛さ、心の痛みを想像することができない人が非常に多くなっているのです。家族の中でも同じような傾向が見られるようになってきました。命の連携が人間としての自然な生きる姿であることが理解できない社会になって来ているように思えるのです。従って、様々な社会問題が発生しています。世界ではテロや戦争が起こっています。自分の信じる宗教以外の宗教を受け入れる心を失ってしまい本来の宗教からかけ離れたカルト的な宗教になってしまいました。身近なところでは虐めや家族による虐待などもそのことを物語っています。虐めや虐待は人間の連携を分断します。虐めの加害者は被害者を孤独のブラックホールに落とす行為です。生きていることに何も感じない、

生きていることに寂しさと辛さ、他者の関係を煩わしく思い、その存在が疎ましく感じ、闘争心、攻撃する心を持ってしまうのです。生きることに光が見えず、暗やみの中をあてどなく彷徨っているのです。不安と希望の無い世界が広がっているように思ってしまうのです。救ってくれるのは、光の中を生きている、喜んで毎日を過ごしている、仲間たちですが、その仲間が自分とはかけ離れた世界にいる存在にしか思えない。そのような心理状態になってしまう世の中で私たちは生きているのです。

私たちは何のためにこの世に生まれて来たのか、生きて何をすべきなのか、人間としての有るべき姿、生き方、人間としてのあるべき精神を探し求めなければならないのです。そのために私たちは子どもの時から勉強をしてきたのです。勉強とはただ単に知識を獲得するだけではなく、知識を基に自分の肉体を鍛錬し、精神を高めることです。頭脳が明晰であるということだけではなく自分の肉体と精神が一体となって自分に備わっている能力を十分に発揮できることが重要なのです。そして自分の行動が他者を支える行動になることによって自分の命の価値はより高められるのです。

生きていることが多くの人たちの支えになっていることを強く自覚しなければならないのです。そのためには多くの支えられる体験をしなければならないのです。自分の命が大切にされる生活を送ることによって生きることの大切さが心の中に芽生えてくるのです。人間としての有るべき精神を持つことができるのです。その精神は「人に愛され、人を愛する」という心、言葉の中にあるのです。これは江刺保育園の保育理念です。

人間の文化は、子どもを育てることによって進化してきました。とくに人間の精神文化は子どもの命を支えることによって進歩、進化してきたと私は考えています。愚かな男たちは権力争い、自己の領土拡大を自分の使命のように戦争をし、敵を殲滅することに努力してきました。自分の利己的な欲望を満たすことに努力してきた。それは負の文化を構築してきました。武器を開発し、今では大量殺人兵器や地球を壊滅させるような兵器まで作ってしまいました。しかし、この愚かな男たちの争いのなかで、自分の子どもを失った母親たちは悲しみと苦しみの中で、平和の尊さ、命の尊さをこの長い歴史の中で養い育んできたのです。この母親たちの心が平和の本質を形づくってきました。人間として生きるにはどうあるべきかを子どもを育てることによって社会にその心、愛するという心を発信してきました。それが今の保育に繋がり、その結果として私たちのこの社会があります。本来は家族によって子どもたちは育てられるべきなのです。しかし、現代社会は母親たちを家庭から働く場所へと引き出しました。保育園を利用している0歳児を育てている母親の40%もいるのです。働くことを望まなくても、働かざるを得ない社会になっている日本は豊かな社会ではなくなっているのです。子どもを育てられない社会は、人間としての生命力を喪失させる一つの原因となっています。生きることの最大の使命は命を育むことである、しかし、子どもを育てることが

大きな喜びから苦しみへと変化してきている。だから子どもたちが生まれなくなってしまった。このままでは社会のシステムは崩壊し人間は滅亡してしまうでしょう。しかし、この問題を解消するために私たちは保育園を生み出しました。家庭で育てられない子どもたちを保育園でその成長を支えるために保育園はできたのです。この社会の中で保育園の働きの重要性はますます高まっているのです。家族に代わって子ども達の成長を支える場所として、命を未来に繋げるための重要な場所になっているのです。

保育の精神

保育を行う上で、保育以外の働きにも共通しているのかもしれませんが、必要な精神は、人間は如何にあるべきなのか、如何に生きるべきなのか、人間の理想とする社会はどのような社会であるべきなのかを、自分の精神のなかにしっかりと位置づけることが必要なのです。それは若い時には柔軟に変化してもいいのです。人間としての精神の根本を、中心をしっかりと自分のものにする必要があります。いまは持っていなくともこれを探す努力を怠ってはいけません。この意味を探す場所が学校なのだと思います。自分の生きる意味を絶えず考えながら生きて欲しいと思います。

保育は子ども達に如何に生きるべきなのかを伝える働きです。人間として生きる精神成長を支える働きです。ですから子ども達の成長を支える保育士は絶えず理想的な人間としての精神を持つことが求められるのです。自分自身が理想的な人間になる必要はありません。人間は不完全な生き物であるからです。理想的になることは現実的に不可能です。しかし、できなくても自分の目指すべき理想、目標をしっかりと持っていればそこに向かって前進できるのです。すこしでも前進したいという気持ちがあればいいのです。この中心は自分自身を強くします。自分はこのようにして今を生きているという自信をもたらすはずです。そして、この過程は苦しみではなく、希望と喜びであるべきです。実際、保育の働きは楽しく、子どもたちとの関わり合いは大きな喜びと感動があります。愛情に満ちあふれているのです。人間は愛情が無ければ成長できない生き物です。叱ったり、叱咤激励をすることによって成長はできないのです。必要なのは暖かく深い愛情だけです。

保育の制度

子どもたちが利用できる施設は保育園、幼稚園、認定こども園の3種類あります。そして家庭の状況によって1号認定、2号認定、3号認定と子どもたちが区別されています。1号認定は3歳児以上で保育を必要としない児童、2号認定は3歳児以上で保育を必要とする児童、3号認定は3歳児未満の保育を必要とする児童、となっています。保育を必要としないとは何らかの事情によって子ど

もを保育する大人がいない状況があるということです。両親とも働きに出ている等の事情によって誰も子どもを見守る人がいないという状況があるということです。幼稚園は1号認定の子どもが利用し、2号、3号認定の子どもは保育園を利用します。認定こども園は全ての施設がそうではないのですが幼保連携型認定こども園は1号から3号認定の子どもたちが利用することができます。そこで働く資格として幼稚園では幼稚園免許証が必要です。保育園では保育士資格が必要です。認定こども園では幼稚園免許、保育士資格の両方が必要です。現在の教師、保育士養成校はどちらの資格も得ることができます。奨学金制度もありますが、都道府県によってその制度の内容に違いがあります。東京では東京都の養成校に入学し、保育士として5年間働けば奨学金を返さなくともよい制度があります。福島県、山形県では地元の養成校に入学し、被災地で5年間保育士として働けば奨学金を返済しなくともよくなっています。残念ながら岩手県では奨学金制度は有りますが、返済が免除される制度はありません。都市部では保育士が不足していますが、地方では逆に保育士が過剰になって来ているのです。地方の中でも町とそうでない場所で子どもの利用数に大きな格差が出ています。奥州市は公立の幼稚園の廃園、保育所の合併等が検討されています。

保育とは

保育は0歳児～5歳児全ての対応が異なっています。0歳児は1対1の対応が求められます。この頃の保育には教育的な対応は無いと思われていますが、保育に関係する者たちは0歳児から教育が始まることを強く訴えています。こどもの泣き声や語り掛け、視線に保育士はしっかり反応し優しい声を掛けるのです。赤ちゃんたちは、その声をしっかり聴き分け自分を支える人が誰なのかを認識するのです。自分にとって大切な人は誰であるのか絶えず注意深く毎日を過ごしているのです。そして赤ちゃんは不思議なことに自分を愛してくれる声をしっかりと認識できるのです。この幼い時代にしっかりと抱きかかえスキンシップをとり、優しく声を掛け、乱暴ではなく、注意深く抱きかかえる等の対応を行うことによって信頼関係を構築するのです。ですから保育園の0歳の担当者は赤ちゃん3人に最低1人の保育がいることが法律によって決められています。2歳児くらいになると子どもたちは自由に行動することができます。簡単な言葉も獲得します。この頃の子どもたちは自分が世の中の中心なのです。他者の気持ちは理解することができません。ですから、遊びの中で物の取り合いやケンカ、中には噛み付き、等の行動が目立ってきます。この社会の中で生きているのは自分だけではないこと、友達という新しい関係が存在することを体験します。この体験はとても重要でケンカをしながら、自分はどんな子どもなのかを認識するのです。自分が男の子なのか、女の子なのか、自分はどんな子どもなのかを自己発見をするのです。出来るだけたくさんの子どもたちとの関わりを持つことによって、良い人間関係を創る基礎が養われるのです。子どもたちは様々な遊びによって、様々な知恵を身に付けます。そして、大切な友達を4歳5歳児になり獲得するこ

とができます。保育士は子どもの成長過程を理解し、子ども達に必要な体験の場を提供します。そして親とは違う愛情を子ども達に注ぐのです。保育は医師や看護師、学校の教師と同様に高度な専門性が求められる働きなのです。以前、子育てはどの家庭でも普通に行われていました。家族や近所等の協力によって母親の子育てを支えてきました。しかし、核家族化になりこの連携ができない社会になってしまいました。ほとんどすべての負担が母親に背負わされたのです。初めて子どもを授かった母親は悩み、苦しみ、孤独になり、子育ての喜びではなく、辛さを感じてしまう世の中になったのです。そして、外で働かなければ生活できない社会になり、子どもを育てることはますます困難になり少子化が進んでしまったのです。この課題を担ったのが今の保育園でした。子ども達の命を支えるため、何が 필요한のか、どのような保育を行わなければならないのか、研究がなされ、保育実践が行われています。

全ての生き物は「子どもを教育することは食べること」として、この食について徹底的に教育します。人間だけが食の教育をしなくなりました。しかし、食は生きるための根本です。地上の生き物は食を知らずに生きることは出来ないのですが、多くの人たちの働きにより子どもに食教育をしなくとも安全で栄養の有る物が十分に満たされているからです。命を未来に繋げるためには食を子どもたちに伝えなければなりません。これを行っているのは唯一保育園だけになってしまいました。0歳児から食事に関する絵本を読み聞かせ、人達の食べている食材を触ったり、匂いを嗅いだり、実際にお料理もするのです。また栄養指導、食育体操などを通年にわたって行っています。好き嫌いをなくし、食べる物がどのように造られ、自分の命を支えているのかを子ども達に伝えるのです。メニューイメージを構築するのです。

人の乳幼児期に大切なのは文字や数を数える、本を読めるというようなことより、想像力を膨らまし、未知なるものを体験し、探し求めること、そして規則正しい生活リズムを身に着け、好き嫌いをなく食事をして、健康な体を作り、優しく豊かで柔軟な精神を身に着けることです。そして、自分は多くの人たちから愛されている、自分の命を大切に支えてくれている家族をはじめたくさんの人たちがいるのだ、という基本的信頼感を持つことと、今生きていることが楽しく、毎日を過ごすことが喜びであり、生まれてきたことがとても良かったと思える自己肯定感を持つことが重要な事なのです。保育の中で子ども達の精神成長を支えるということはこの基本的信頼感、自己肯定感を子どもたちが獲得することに尽きるのです。そして、保育園で働く者も、基本的信頼感、自己肯定感を持っていることが大切な資質になっているのです。自分の生命力を、生きる力を、生きることの素晴らしさを、優しい言葉や楽しい体験、一緒に食事、等を通して保育園の子ども達に命を手渡すことが保育士の働きなのです。

保育は命を伝える働き、健康な肉体、優しく逞しい精神、希望を伝える働き。未来を創造し、他者への優しさを想像する心を養い育てる働きなのです。人間の生きる根本が保育の中心となっているのです。教育は出来る、出来ない、という能力向上と多様な知識を身に着け、競争することでさらに能力が向上するのだと捉えられています。人間の自然な生き方は、そうではなく競争して他者を打ち負かすことではなく、お互いを支え、支えられ心のつながりを持って生きることです。生きるために自分の出来ることがなんであるのかを自己発見できる力を養い育てることが教育だと思うのです。そして、獲得した生きる知恵を、未来を生きる子ども達に手渡すことが保育なのです。